保育の窓(5)

教育実習を考える

原口　純子

はじめに

二年次の教育実習を終わって、キャンパスに帰ってきた学生の表情は、一つの事を成し遂げた充実感で生き生きしています。出かける前の心配そうな、自信なげな表情から比べると大違いです。学生によってみちがえる程の成長を感じさせます。それ程に教育実習は教室では成しえない教育力を持っています。この三週間に幼児に育てられ、実習園の先生方に育てていただいた賜物と思います。教育実習は幼児教育科の各教科が総力を挙げて育ててきた事柄が発揮される総合教科なのです。二年間の中で最も充実した言わばハイライトなのです。この経験を通して、学生は職業としての幼児教育を自覚し、我が身の適性を省みます。

私は三月まで公立幼稚園の園長をしていましたが、四月から保育者を養成する仕事に替りました。

教育実習という事から言えば、受け入れ側から依頼する側に一八〇度替った事になります。

そこで、教育実習について受け手の側と依頼する側との両面からの経験をとおして、保育者を育てることについて考えを述べようとするものです。

教育実習を受け入れるということ

幼稚園に在職中には、それ以前に保育養成の短大に勤務したこともあり、養成校側に対して理解ある園長で、頼まれれば可能な限り引き受けていました。一年次の観察実習でも、二年次の教育実習でも受け入れることにしていました。

地域にある短大の学生を毎年、五月（一年生）と十月（二年生）に受け入れていましたし、不規則に卒業生が出身園として実習に来ていました。

実習生を受け入れる事は指導に手はかかるし日誌のコメントや指導案の指導等、担任にも負担がかかり、幼児はかき乱されるし、時には貸し出した紙芝居や本はなくなるし、行儀が悪い等々一般には敬遠されがちですが、次の理由から私は教育実習生を必ずしもマイナスとして受け取ってはいませんでした。

教えることは育つこと

以前は実習生をいつもベテラン保育者のクラスに配属していたのですが、ある年実習生が重なってやむをえず就職して二年目の保育者のクラスに配属させることになりました。いつも一番下で、自信もなく経験のある保育者について歩くような感じでしたが、自分より年若い人が学びに来ることにより、指導的立場に立つことになって俄然力が入りました。実習生の幼児への言葉づかいや、絵本の読み方などから自分のやり方を振り返りました。指導案の書き方も先輩の先生や主任に相談し、どう指導したらよいかを学びました。環境の整備、日誌のコメント等を実習生以上に真剣に取組み、三週間が終わった時には保育者として、一皮脱皮したくらい成長が感じ

られました。園長が注意したり指導してもなかなか納得のいかないことも、実習生のしていることを見て、自分で感じてわかったり、気づくことが成長につながったのです。

実習生は若い保育者と年齢も近く、何でも気軽に相談ができ、企業就職を希望していたこの学生が、終わる頃には、保育の道を目指そうかと真剣に迷っていました。

自分のクラスを客観的に見る

たとえベテランの保育者でも保育の渦中にある時と、他人が保育をしている時に外から我クラスを見るのとでは見え方が違います。いつもおとなしく目立たない女児がままごとコーナーで思いの外きつい言葉で、弱い幼児を拒否している場面を見たり、仲良しグループと見えていた男児グループの友達関係が微妙に変わってきている様子に気づいたりします。

幼児の動きを見てクラスの環境設定を見直してみる等、客観的にクラスを見る機会は大切です。

人手としての実習生

小規模園の場合大人の手が足りずやりにくい保育活動があります。人手が沢山欲しいアスレチックのある運動公園の園外保育や巧技台やマットを沢山使うサーキットの遊び、担任一人では手が回りかねるクッキング等は実習生が来ている時に組むことが多いのです。もちろん行事ばかりでは困りますが、こ

れらも大切な保育活動であることを知ることは無駄ではありません。幼児の降園後の時間にお面用バンドをまとめて作ってもらったり、普段担任だけでは手にあまる仕事を手伝ってもらう事も多いのです。保育内容上の人手としての実習はあまり問題はないと思いますが、この時とばかりにどぶさらい、草抜き、倉庫の整理などさせるという話も聞きます。確かに幼稚園の環境整備ではあるのですが……。

保育日誌

学生にとって実習日誌はかなり負担になるようですが、よく書けた日誌は保育者に参考になるものもあります。一般に保育者は実習日誌のように細かくは書きません。日誌の中に思いがけない発見があったり、自分とは異なった実習生の気づきに教えられることもあります。

思いがけいな教材

一人の保育者が持つレパートリーというのは、その人なりに決まったものがありますが、実習生が持ち込む教材には、時としてびっくりするような、あるいは斬新なものがあります。幼児にとってもちょっと変わった面白い経験ができます。その後保育者がうまくアレンジしてレパートリーに加えるなどということもあります。

若いエネルギー

保育者が高齢化しつつある公立幼稚園などでは、実習生の持つ若いエネルギーは幼児にとって魅力的なものです。保育の上手下手ではなく、はつらつと体を動かし、幼児と共に走り、サッカーを興ずる若い生き生きしさが幼児をひきつけるのです。

園にとって実習生がいる期間は緊張があり、うっとうしくもある上、実習ノートのコメントや保育指導その他、お手伝いしてもらうことの段取りまで何かと忙しく、終わるとほっとするものです。これまでも随分沢山の実習生を迎えて来ました。すぐにも採用したいような学生から、明らかにやる気のない学生まで実に様々です。どの人も初めはまるで機械

仕掛けのロボットのように緊張しきって来ていますが、次第にほぐれて、笑顔が見られるようになります。三週間が終わって別れの挨拶をしながら、ぼろぼろ涙をながす姿に、初々しい感動が伝わってきます。

教育実習生を迎え、負担ではあるけれども学ぶものもたくさんありました。

実習生を指導するということ

一年次の観察実習は五月の後半から九日間（二週間）来ていました。

年齢による違いを知るために、一週ごとに配属を変え四歳と五歳のクラスを経験させていました。幼児を見る、幼児と遊ぶ、幼児を知るということに重点を置いて、九日間の実習が終わった時に子どもに興味や親しみや喜びを見いだしてもらえばよいと考えていました。

入学して間もない五月ですから、高校生同然の素人で、元気よいベビーシッターのようなものでしたが、危険でない限り文句をつけず遊ばせていました。見ているだけでは、幼児と生活する喜びは感じにくいからです。

二年次の実習はクラスを固定して、幼児の名前をおぼえて、担任の学級経営に添わせて、観察、部分保育、一日保育と三週間の実習をします。実習生には園概要、教育課程、指導計画部分抜粋、園だより、クラスだより、給食予定表、実習計画表を渡します。

教育要領が改訂されて、実習生を迎えた時に、環境を通して行う教育における教育実習の在り方はどのようにあったら良いかと、悩みました。「遊びを通して指導する」ということを学生にどのように経験させたらよいのでしょうか。

部分実習というととかく紙芝居や絵本、あるいは製作活動などの教師主導型の場面をイメージしがちです。けれども幼児教育は環境を通して行う教育で

すから幼児の遊びへの関わりこそ大切な部分実習であることを自覚しなければならないのです。幼児が主体性をもって環境に関わる遊びへの、保育者の関わりや役割が実習を通して理解されないと、どんなに絵本が上手に読めても、保育者として成りたたないことになります。

遊びを通して指導するために

遊びの関わり方を教えることはむずかしいことです。教育実習で、遊びへの関わりはしばしば勘定の外になっていて、部分実習の意識もないことが多いのです。学生も「あ、遊びなら大丈夫、遊べるから」と気楽に思いがちですが、この遊びで幼児を育てようというのですから、これこそ真剣に真剣に取り組まなくてはならないものです。

遊びへのかかわりの指導は意外にむずかしいのです。熱心に取り組む学生は幼児の遊びを壊して自分のやりたい遊びを押しつけることに満足感をもったり、自分中心に遊ぶのではなくもっと幼児の遊びを見るようにというと、無関心な表情でぼーと立っていたり、幼稚園側の思いはなかなか通じないのです。

遊びを通して幼児を育てるために実習生に育てたいものは、ありきたりではありますが、①幼児理解と援助　②遊びの内容を見る目　③幼児の育ちに相応しい遊びの種類、環境や教材の研究です。

① 幼児理解と援助（共に在る・心を添わせる・見ている・必要な時援助する＝かかわる）

観察は幼児理解の方法ではあるが、ただひたすら誰と誰が、どこでなにをしているかだけをみるような観察ではなく、もっと心をよせた、そこにいる幼児の気持ちに添った見方、感じ方がほしいのです。カウンセリングマインドで幼児に接することができることも望まれます。

実習としては、最初の二日間はごく普通の幼児に朝から降園までずっとついて、観察し、遊び、その幼児の立場や気持ちになってみるという経験を持たせてみます。男女一名ずつ経験します。メモ、ノートなど持ち歩かず心に刻むのです。実習を教師の立場の練習ではなく、幼児の立場の練習で始めるのです。

② 遊びの経験内容の理解

この遊びの中で幼児が何を感じ何を経験しているかを読み取る目を育てたいのです。幼児理解と重なる部分もありますが、特に取り上げるのは、経験の内容の理解こそ、環境を通して行う教育の基本だからです。保育の記録を取るのもいろいろ使い方はありましょうが、幼児の経験内容の分析に使いたいのです。自主的に元気に遊んでいるからと放任されがちな、そこらを飛び回って幼児の遊びも、一度経験内容の分析をしてみたら、もっと成長に相応して環境を整えることへの足がかりをつかむことになるかも知れません。

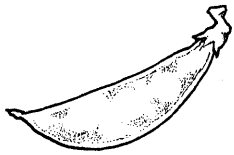
③ 環境の設定（教材、遊びの提供も含めて）

成長や興味関心に合わせた教材や遊びを適宜提供できること。「人生で必要なことは全て砂場で学んだ」という方もいますが、それは象徴としてのことで、実際に手で触れ、体を動かして、経験させたい遊びはたくさんあります。

実習生が色々な教材や遊びを環境として提供してみることはよいことです。もちろん担任と十分な打ち合わせの上でのことですが。労を厭わず、果敢に教材を集めてくるのは実習生の良いところです。

クラス全体をまとめたり、掌握する経験

一人一人を大切に、遊びを通して教育するといっても、クラス全体で行う活動も集合して行う活動もあります。絵本、紙芝居、給食、帰りの会、フォークダンスやゲームなど一斉に行う経験も実習生には



大切です。学生によっては、一斉課題活動が多い幼稚園に就職することもあるのですから、基本的なことは経験させておくことにしていました。

指導案・日案

養成校側にまわって困惑したのが、指導案の書き方です。幼稚園では、我が園の教育課程や指導計画、幼児の実態に合わせて、園の指導案の書式により書かせていたのですが、短大には実態がない、指導計画もない週案もないというわけで、基礎となる事柄は説明できますが、空疎なものとなります。短大では教えたつもりでも、学生はよくわからなかったということになるのではないでしょうか。

幼稚園側から指導案の書き方も習ってこなかったのかと非難されそうですが、実態に合せるものは、短大では教えにくいのです。

養成校がなしうること

幼児教育に当たる者には「歌って踊って元気よく」ばかりでなく、その人なりの価値観や人間観、保育観をもって欲しいと思うのですが、二年間という時間は即物的なことにばかり押し流されてしまいがちです。先日の実習園と短大の実習懇談会の席で、幼稚園側から「保育者として育てて欲しいのは知識や技術ではなく、感性を育ててほしい」との話がありました。確かに幼児教育に携わる者として、よき感性は何にも替えがたいものです。しかし、感性や人間性は養成校で教えられる物ではないのです。やむをえず基礎的な知識や技術や保育観を身につけるべく努力をしているのです。

感性を育むのは、幼児教育の大切な課題なのです。

（洗足学園短期大学）